

博士論文最終審査結果報告書

看護学研究科	学籍番号 氏名	206104 増田 政江
論文題目 重症心身障害児（者）の施設入所に関する母親の心理的プロセスの探索		

審査委員

区分	職名	氏名
委員長	教授	廣瀬 規代美
委員	教授	松田 安弘
委員	教授	大澤 真奈美

論文の要旨

本研究は、施設入所している重症心身障害児（者）の母親が、わが子の施設入所を考え始めてから入所中の現在に至るまでの間の心理的プロセスを明らかにし、重症児（者）の母親への心理的支援の示唆を得ることを目的とした研究である。

便宜的サンプリングにより3つの施設からの母親の紹介とともに、スノーボールサンプリング法にて研究協力が得られた母親26名を対象に半構造化インタビューを実施し、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Strauss&Corbin版）を参考に分析した。

19のサブカテゴリーと11のカテゴリーからコアカテゴリー《わが子を守る母親としての責任はかわらない》に統合された。母親は、【絶望感に苛まれながらもこの子に全力で向き合う】中で、わが子の施設入所を【この子の将来への不安】から意識し始め、【わが子を施設に託すかどうかを考える】。【わが子を守る母親としての責任】を強く意識していた母親は【施設のことは考えてもいなかった】。しかし、自身の病気や子どもの就学等の理由により【わが子を施設に託さざるを得なかった】と、わが子を施設入所させるしか選択肢がない心理状況であった。施設から入所の打診や母親自身の病気等によって、わが子を施設に託すことが現実のものとなった時に、母親は<わが子を手放すことにためらう>と<ためらう気持ちを鎮める>という双方の気持ちから【わが子を施設に託すことに葛藤する】心理状況となった。わが子を施設に託したことで<この子への申し訳なさ>等から【わが子を施設に託したことに苦悩する】状況が続き、【わが子を任せられる施設か見極め（る）】ながらも【施設との立ち位置を見出す】状況であった。また、母親は加齢等により【わが子を守れない不安】が高まると、わが子の最期を見届けることを願い【施設に託してもこの子を残して逝けない】という心理状況となった。母親の心理的プロセスには、特性として施設に託すことへの葛藤や苦悩が存在し続け、《わが子を守る母親としての責任はかわらない》といった心理的プロセスであった。

母親は、施設入所から入所中の現在までの間、わが子を守る母親としての責任やわが子を守れない不安、施設に託すことの葛藤と苦悩の中にあった。そのような母親への心理的支援としては、母親が現在プロセスの中のどのような心理状況であるのか理解しながら母親の思いに耳を傾け、ありのままを受けとめることが重要である。本研究で明らかとなった母親の心理的プロセスに関する知見は、在宅や施設で働く看護師等医療福祉専門職者が母親を理解し支援することに役立つ可能性がある。

論文審査の結果の要旨

令和5年6月29日、審査委員全員の出席のもと、提出された博士論文に関する口述試験を実施した。主に、審査基準1) 看護学の研究として意義があるか、6) 研究目的に適った研究デザイン・研究方法を用いているか、8) 既存の方法論を正確に適用できているか、11) 研究結果とその解釈を区別して論述できているか、4項目に関連する以下の点について口頭試問を行った。

(1) 心理的プロセスとは何か。GTAを用いて心理的プロセスを明らかにする意義を説明する。

(2) GTAの研究方法の特徴は、どうしてそれが起きるのか、どのようにそれが起きるのかを概念化し、中核カテゴリーについてカテゴリーすべてを使って関係性を図で表し、ストーリーラインで内容を記述することである。ストーリーラインについて説明する。

上記(1)については、目的に対応した回答があった。(2)については、カテゴリーの関係性を視点に分析の思考が説明されたが、思考の内容が結果であるストーリーラインに反映されていないことを確認した。

以上より、研究目的に対応した分析方法の活用については理解できていると判断し、再審査までの期間を考慮し、課題を①図とストーリーラインにすべてのカテゴリーの関係性を示し、その関係性を反映した中核カテゴリーの説明をすること、②結果と考察を区別し論述することとした。

令和5年7月10日、再提出された論文内容を基に口述試験を実施した。審査基準8)に関連し、GTAを活用した結果の記述として、概ね時間軸を視点とする心理の経過であったことから、カテゴリーの関係性の具体化について質疑応答を行った。

既存の方法論の正確な適用に関する説明内容は、審査基準に充当する内容であると判断した。すべての審査基準を満たし、審査委員全員が学位論文として審査に値すると判断した。

看護学研究科全教授が参加する最終審査(令和5年8月2日実施)において、受審学生は、論文審査の結果を受け、研究の意義、研究目的に対応しGTAを活用する理由、心理的プロセスの中核カテゴリーに関する時間軸と縦軸のカテゴリー間の関係図とストーリーラインの説明、心理的プロセスの結果から考察された重症児(者)の母親への心理的支援について、説明された。また、論文の内容は概ね指定時間に簡潔・的確に発表した。

質疑応答では、特性と次元の分析方法、パラダイムモデルを活用した結果と関係図への反映、時間軸と特性や次元を縦軸としたカテゴリー間の関係性について具体的に説明した。また、心理的プロセスの心理状況に対応した母親の心理的支援についてスライドを活用し具体的に自身の考えを適切に説明した。

このことにより、本学博士後期課程のディプロマポリシーである「DP4 看護学を専攻する看護専門職として必要な高い倫理的思考力をもち、心理を探究し続ける。」「DP5 革新され続ける看護学の充実・発展に向けた研究の推進に意義を見出す。」を満たしていると判断した。

以上の結果をふまえ、最終審査同日に行われた看護学研究科教授会において本論文が本学博士論文の基準を満たしている旨、全会一致で可決された。